

Q：2.2÷0.6を計算するときに、22÷6として筆算しますが、あまりは4ではなく0.4にします。なぜわられる数もとの小数点の位置に、あまりもあわせるのかうまく説明できません。【5年】

**A：割り算の商にあたる「いくつ分（何倍）」の値は、式の関係とした相対的な見方をしても変化しないのでそのままでもいいが、あまりは実際の数の大きさとして考え、もとの単位に戻さないといけないということを徹底させてください。**

(1) 除法の計算の仕方について立ち返る

「わり算では、わる数とわられる数に同じ数をかけても、同じ数でわっても、『商』は変わらない。」という除法のきまりを確認する。

$$\begin{aligned} 2.2 \div 0.6 &= (2.2 \times 10) \div (0.6 \times 10) \\ &= 22 \div 6 \end{aligned}$$

(2) あまりが表す大きさの意味を考える

2.2 ÷ 0.6 の計算も、

「2.2 Lの牛乳を 0.6 Lずつのコップに配ると、何個のコップを一杯にできて、何Lあまるでしょうか」という問題とする。

これを 22 ÷ 6 として考えるのは、「0.1 L 22 こ分を、0.1 L 6 こ分ずつわけると」ということと同じである。（つまり「22 d Lを 6 d Lでわっている」のも同じということ）

そして、「22 ÷ 6 = 3あまり4」となるが、あまりは「0.1 L (=1 d L)が4こ分」という意味を確認する。よって、もとの単位にもどす必要があり、0.4(L)となる。

ここで具体的な量の単位を入れて説明したのは、わり算の小数点移動は、「数の相対的な見方（例えば、2.2を0.1を22個分、0.6を6個分というように見る）」を利用して利用している。

また、あまりを4とした児童には、「わられる数が2.2 Lしかないのに、あまりが4 Lになるのはおかしい」ということを意識させて、あまりはわられる数より小さいということを確認する。

(3) 検算をする

計算した後に、(わる数) × (商) + (あまり) = (わられる数) という式にあてはめて、「0.6 × 3 + 0.4 = 2.2」と検算を行う。

答えが合っていると思っても、検算をすることで誤りに気づく児童もいるはずである。

「どのようにすれば、小数のわり算であまりを間違えずにできるか」という問いに対して、慣れないうちは、計算方法を言葉で覚えさせることも必要であり、児童の言葉として「小数のわり算であまりを考えると、あまりの小数点は、わられる数の元の小数点に揃える」ということがでてくるようにしたいものです。